



アイヌ語で「広場」の意味  
文 北原モコトウツン 絵 小笠原小夜



道内には、アイヌ語が基になった地名がたくさんあるよ。いくつ読めるかな。  
①空知管内長沼町馬追  
②岩見沢市栗沢町清真布川  
③釧路市大楽毛

＝答えは紙面の下に

## 読んでみよう

アイヌ語には日本語にない音があります。これをカタカナで書くときには字を小さくして表しています。このページのタイトル「ミンタラ」の「ラ」もそうですね。小文字は全部で14種あります。毎回、そのいくつかの読み方をしょうかいします。

今回は「ハ」です。たとえば「イタハ（言葉、はなす）」、「チカハ（鳥）」というときの発音です。口をアのように開けたまま、軽く息をはく音です。

「ハ」の発音を動画でも学べます。出演は関根摩耶さん。指導は千葉大学の中川裕先生です。スマートフォンを持っている人は、QRコードから読みこんでください。



## クイズの答え

※原稿を参考にしてください。

①「ミンタラ」の「ラ」もそうですね。小文字は全部で14種あります。毎回、そのいくつかの読み方をしょうかいします。

②「ハ」の発音を動画でも学べます。出演は関根摩耶さん。指導は千葉大学の中川裕先生です。スマートフォンを持っている人は、QRコードから読みこんでください。

③「ハ」の発音を動画でも学べます。出演は関根摩耶さん。指導は千葉大学の中川裕先生です。スマートフォンを持っている人は、QRコードから読みこんでください。

④「ハ」の発音を動画でも学べます。出演は関根摩耶さん。指導は千葉大学の中川裕先生です。スマートフォンを持っている人は、QRコードから読みこんでください。

ミンタラのこれまでの紙面は、どうしん電子版「親子ページ まなぶん」で読むことができます。今の「先人たちの物語」だけでなく、アイヌ文化をめぐる季節ごとの話題を解説する記事もありますよ。「まなぶん」でけんさくすると、このページにたどりつきます。ぜひ読んでみてください。

# 先人たちの物語 シンリッオレッジ

監修 佐々木 利和

## 文化や言葉 ユーモラスに語り残す

アイヌ語やアイヌ文化の取りもどし運動が盛んになってきた時期。それは今から30年ほど前のことです。白沢ナベは、泉のように豊かな知識を持ち、多くの人々に教えた長老の1人。「フチ（おはあきむ）」、「ナベちやん」と呼ばれたけれども、なまじりませんでした。ナベが生まれたのは、千歳市ウサギマイのエウコッ（今の千歳市蘭越）です。そのころ付近には和人は暮らしていません。千歳川でサケをとって人工ふ化をする所がありました。そこで働いていたのはほとんどがアイヌの大人たち。ナベの父もそこで働きました。ナベは5歳のころから、ふ化場の仕事を面白がって手伝い、大人になってもふ化場で働きました。妹をおぶって畑仕事をやるお母さんを見ていたらじっとしていられず、畑も耕しました。

ナベと兄弟たちは学校に通っていません。学校まではとても遠く、冬になればとても通えないので、ナベの父は、子供を学校に通わせる気になれませんでした。ナベの兄は学問に興味があり、リスをとったり魚をとったりして働きながら、家では勉強をしていました。ナベもウサギのワナのかけ方を教えてもらって、ウサギをとりました。

ナベの父は、アイヌの文化や言葉を語り残すことに強い思いを持っていました。しかし、年を取ってそれをもっとかしくなると、ナベに向かって「おまえが言葉を残すんだ」と言いました。ナベはこの大役にとまどったことを「残せとていつか残すのか、ウコタンワ（ママ）をめぐってほんと置いておいて（も）エアイカブする（できない）もの」とユーモアたっぷりに語ります。しかし、その役割を十分に果たしたのです。（敬称略）

5歳のころから親の見よう見まねでふ化場の仕事を手伝った



ナベの隣人で、よくいっしょに講演などをした中本ムツ子が、アイヌ語と歌の集いを始めた。だんだん参加者が増え、大きな動きに

子供のころから丸木舟にのってきたナベは、船のそうじゅうがとても上手だった

ナベが語り残したたくさんのアイヌ語は「アイヌ語千歳方言辞典」にまとめられている。いくつかの音話は絵本にもなっている

白沢 ナベ（1903～93年）



1993年は国際連合が定めた「国際先住民年」でした。このころ、運転手や保育所の先生、お弁当屋さん、自衛隊で働く人などさまざまな仕事をしているアイヌの人々が、それまで知らずに過ごしてきたアイヌの言葉、生き方、心を知りたいと強く思うようになりました。先住民とは、元々暮らしていた土地が他の民族の国に取りこまれた状態で暮らしている人々のことです。多くの場合、取りこむ側の民族とは言葉や文化がちがいで、またいろいろな不利益を受けることもあります。そして、その国の中で存在が忘れられてしまっていることもめずらしくありません。アイヌ民族は、ヤウンモシリが北海道という名前になって以来、日本の言葉や習慣を身に

つけることを求められてきました。それだけではなく、「北海道には歴史がない」と言われたり、和人から見た「開拓（人のいない荒野に分け入ること）」の歴史ばかりが語られ、アイヌはまるでういないかのように、また元からいなかったもののように思われてきました。ナベのように、明治から平成の時代にかけて生きてきたアイヌは、厳しい歴史やアイヌであることの意味と向き合い続けてきました。ナベの言葉にも、アイヌが置かれた環境に対し申し立てをした気持ちが見られます。しかし、とっさのひらめきやユーモアに富んだナベの語りには、重いばかりでなく、どこか希望をあたえ、強さを感じさせるものでした。